大槻文彦講演筆記 二

写本

洋学文庫
文庫8
A 308
2

43-7209 (13B)

言文一致の標準語

「ラヒド大ーじしは
近来新聞紙記事
す、彩な
ることに
すらが
甚だ心

即ち今
ませし、
けれども
自らの國
[illegible]、[illegible]
ある、之を輝[illegible]
[illegible]と云ふこと、日本の[illegible]
暗みる[illegible]
[illegible]と思ふ
[illegible]せられた

〔　〕

罪人がある時也しまい、矢張り関東詞の一本調
子であり[illegible]、電話[illegible]が之は色々
機械に掛ける詞であるから矢張り関東詞
の東京詞で一本調子の方が宜しいやうに心得る
のです、私らが大阪へ行つて或る本屋に居

いたが其床屋の家の小僧が雑話をするのを丈
陰詞であるけれども電話口へ掛ると東京詞に
なる、之はどうも云ふ仮かと思うに電話交換を
は大抵女でせう東京生りの者が行って居るの
で自然詞が東京に移る、そうして電話機械に

掛るには東京詞の方が好いと見るのでせう、
さうやうやうもあるが多かれども東京
詞が宜からう、兎に角東京詞が変ってゐる
八田君の人も東京の詞を好んで稽古をして居る
おとなりやうも他も加はる、そは此東京詞の

部分とするものを廃してそれを土臺にしてい
本の詞を作る宜からう、之は私はみうとは
言へども一体の場合である、そこで吐し詞を変
化せしめて作るに就て用意とする所の箇條がある
る、言語の起らぬ前から詞を孫らせばなら
ぬ、言語の起る前から詞を孫らせばなら
ぬ、それは文法を言ふ上にも研究する必要
ある詞であるけれども「さうでなくつては」
と言ふ詞がある「さうでなくつては」と言ふのが文法の
上の動詞だ「さうでなくつてはかの動詞である、之を故

京島用氏

いて別けるやうにすると「きそ」とか「ぬ」とかの風に言ふと「こゝ」「ア」の中から脚切りにしまけやらぬ、文法が立たぬやうなものである、文法の上に数を保つの方法不適当だと思ふ、それが

〔　〕

ら日本の人民、多数の人が使つて居る詞と言ふものを土台にしまけやらぬ、所で関東方面五畿内辺で使つて居る詞と言ふものは どうしても之は自然に出る、其他の地方の詞は殆ど捨てまけやらぬ、それから使ふ

俗詞とそのものは異なるとまれ、また
いい、俗語の詞とはふるの体、雅びまれ
四、そのかたちして唐詞、漢語とそのもの体
けて日本在来の詞、日本の詞を用ゐる、斯う
ちうは無論必要であらう、此節大唐唐詞が

原稿用紙

原稿用紙

随つて来て人のつきあい、交際りと言いて分
るのを交際、寄り合ふと言いて分るのを集合
、形体と言いて分るのを監督、身持ち行状と
言ふのを品行、自輕と言いて分るのを質素、
持ち合と言いて分るのを関係あると言いて居

3、値段を代價、受持を担任、などのことばは
ちがうものと反対、しまったりを習慣まで と言ふ
、ちょうどやうな習慣担任関係皆易しいと言
ふ日本にはチャンと一方に分る詞があるのに
唐詞を使ふ使ふ、之はあまり近来の流行りである

四で詞の上に一つ考うべき話であるして、之は
日本の詞があるのであるから日本の詞を使う
方が無論宜かろう、分り易くして宜かろう、
元来前に申した通り極くの場は詞と文章
は同じものだ、詞が変れば文章も変りて来

左、奈良の都の時分には「焼しく、能くと
言ふのが山城の京都では「焼しと、能し」と
言ふ風に使つて居る「みき、やる」と言ふの
を「から、やる」「浪とそいはんや」を「まいて
つはんや」奈良では「山で左あき」と言ふの

〔　〕

を山城の京都では「山こそ左あき、左かけれ」
と言ひ、奈良と京都とでは此の詞も文章詞も変
つて居る、之も自然の結果である、それである
から今の世の中でも話が変つて居ます話を書いて文章とまーして
真つと言ふ人は無論の話である、此昔の好い

の者今日もそれを学ぶって話分変れば文章の書
き方、文法も変へて来たる話である、それ
でも今の中国語は日本語に近づいて居ると
外国人が日本へ来て、横浜で稽古をした日本
語は神戸へ行くと使へない、長崎で稽古した

〔　〕

日本語は通じない、随分不
都合な話である、軍に勝つて人の国を奪るそ
れを日本の領分にしようとする所に就ては甚
だ人民に日本の話を教へる迄もの加第一にす
べきものである、今度も露と軍に勝つて朝鮮満

那方より動くも日本の勢力がみなび、之を開く
ものとするのは日本の詞を弱めるの者第一番
先生にちがひ乃ちあり、故が臺灣より滿洲か
り朝鮮なり、日本の詞を弱めんと思ふには
文章詞は斯ちいちがが話し詞にちがうと出ふう

〔 〕

ぬは此の詞を教へて宜しかるべし、臺灣の學
校なりても書物が出来て一定して居るけれ
ども未だ本当には出来ず、それで東京の教師が
行けば東京の詞を教へ大阪の教師が行けば大
阪の詞を教へるやうに出来てどの詞が宜い

が分らぬ、是非後で又一つ詠い詞とするものを考へなければならぬと作って一つ拵へたものを拵へて弘めなければならぬ。それで詠い詞で文章を書くように教科書其他も皆一定したいと生れて親の膝許で王道自然に詞を教へられ

れ七八の位になると色々大抵の話は出来る、

そこで自然に覚えた詞で文章を書いてゆけば、

之を読むの文章を知らずしらずの跡の意味は

直ち解せる、さうなると必ず拵へ物語と云ふて

此言文一致と云ふ題して日常生活の話と

ものが一切にまつてそれが書物の上に現れて、わびる美文章に書らく為るに中るにたち年の人民の言向、智恵の進み方はおれ程であらうと思ふのだ、それでいつて其為面白い話である校長先生の祝辞文である

から面白くしようと云ふ、其の日年金の詞の迷はしい人おものであり、之に東面の詞の尾前が協を引いてあり、之を能く味はせをい……

[ ]

61

言文一致又一つの立派な規則を造つて、其規
則を皆が擁るやうにしなければ、又之を書く行ふや
うにしなければ、之れは無論空
論の心配に成る必ずなりますね。
故に日本國の國言葉と云ふものは、現在の如
く方言でも、其土地限りの方言でなく、東京か
ら全國皆教育して行くのみは文
章言葉のみを以て居つて、其他の話言葉の一
日本の國言葉と云ふものは何もないです、悪

都で……京都は定年は都であるけれども、東京は東京、京都は京都言葉というもので、却て我が日本の國言葉であると云うのは一つもない、我はマアどうしたものであるか、と云うの國でいうもうもうが、日本は強て酷式すれば、……是は封建の余弊で、大名と云うものがあって名々自分で界を極めて他國の者を入れない、交通を厳重にして居る、道路も谷間い処を作けるにも、山を穿ち陸地の処を作って、所謂要害として拵えた、秋芳の國は仙台藩であるが

角屋製

いまだ、仙台と云うの処は奥州に在って隣の大きな領分であるけれども、一の方言がある人とちがって、我が仙台の方言で、自分の國言葉、國手形……（英語なる）偶々江戸に節番として江戸に在勤をして東京言葉を覚えて國へ帰へると非常に横柔した、生意気になると言うのとか、自分の國の習慣を破ることが言って人が接待した、というものの簿にもさしらしかったが、ろくで一つは其藩の内の人民であるとと云う証拠にも是がなったであり、これで他行特

の者が入込んで来ると直ちに分る、封建時代
まさに云ふ美学がまだまだ知らぬ、わさ
い大名はどうか知らぬが、最早十八万石国
主以上ともなると言葉が違ふ、これ故に二百
六十余大名もあるが、全国の言葉がまちま
である、これでむし河一つ隔つて居ると早や
言葉が違ふ、これで言文一致すれば甚だ文
章が容易くなる、然るに東京の方言でも、一東京の方言と云ふものが
十記文をとるあると私共の国の者は実に

角屋製

らぬ（笑声起る）ふうぬるとはそもそもおしやら
ふる、ボンヤラ云ふれる言葉の味ひが分
うぬのである、「てまをは」とか云ふものが少
しむづかぬ、それは人に向つて罵詈して居る言
葉か、或は軽蔑して居る言葉かそれも、東京
でちやうと「畜生」と云ふ言葉があると、こ
れが結つて人を罵るとまるで「畜生」と云ふ言
葉もあり、又酷く羨しいとまつも「畜生」と云
ふ言葉もある、東京人は云つても仙台人は
ふうぬい、「畜生さま」と言はれんとまつも

同じくする者にて、東京言葉と申して宜敷い、之をソックリ……言文対譯せらるゝものゝ方法は大間違です、そうさて九州ちゃぶ九州、奥州、奥州が東京に成ったる東京と云ふやうなる本読又は何も同じやうにまちて間違はぬやうにしなければならぬ、

今の文章言葉と云ふものは多年の間宣敷く諸流に成る、学者で漢学し練磨して居りなまれかゝる、文章の上の法則は自ら対譯を生来て成る、又美しいと云ふ……美と云ふものが

対譯を出来て居る、話言葉と云ふものは九百年位北方丸で地郷で、是は丸で地方丸で地郷で、是は丸で地方で仕舞つて学者と云ふものは相手のない、学者はかりでなく、全体世の中の人が筆をかけない、是は記述者は記述、手を出して居ることは……陸手でなくて居るもので、是は要旨院系議院議員の百人の言葉が速記録になって官報に出るのと御覧なさい、隨分面白い、アレは即ち全国の方言と云ふものである、アレは即ち全国の方言と云ふものゝ共通語である、そうさてばかり言う

て行くことでもいけないが、何となく気
はちがうらしい、うさんで北陸筆談と云ふものが安
るです、どこの国の言葉、どの場所の言葉と
断ることと云ふと、誰も無論異論のないのは都
の言葉と断ることです、とさうして此都の言葉
は寸寸、自分で同じ自分で差へて見
る、都が善いか悪いかと云ふことをこゝ都と
云ふことは風俗は何も為事時代から出て来
る、それから種々の人が集まって生存競争と
云ふこともある、言葉は一種の言葉をあすの

角屋

てある、併し都と云ふ資格を
之を指導者取ることと云ふと、都が他へ移ること
とるあることゝ、北海道の都を遷すことゝ
いふことと云ふと、今まで作った言葉が一証拠を
取しみなって、今度は北海道の言葉……実産
起る）併ちながら一の例があって、昔奈良の都
を平安に遷したら、奈良の人が残らず平安へ
移つたです、士族以上の身分のある者は無
論として、商人等も移つた、それでアるから
言葉は奈良ましけれども、東京の都へ

北海道は遠方と云ふことが有るとしても、東京の住民が殖るだらうと思ふ、皆な例外として、又移うのとして先づ東京は東京で、都市としても是れ程の大都会を為して居るから知れぬ、これは要用利加の都は華盛頓で、それから、ボストンの方が盛んである、これは

角屋製

京都が先年都でありたれが東京へ移りたれが京都が言ふが東京へ移りて来て東京から見て五分の一のサ様である移りて来ても東京の大都市に言法を移すことあり事なれども東京は中央の上から大都会に為すと云ふことは許りでなく東京のみならず仏東京言葉と云ふ事を施して市内の人民の言法が統一にならたとそれでマアさう地方の訳が日本に仏蘭西都かこうなると見なければ京都も先日の

都で歴代王朝の御位に即かれる毎の祝は
京都にのみ申し上げ奉るに過ぎず
江戸にては
為を一つ以て見ると競爭者が二つ出る其の
所以は申すまでもなく下にすると云ふや
うなことを先づ御覧になって見ると云ふと何の為の
らうか京都の言葉は上方弁と云ふて
とかなりまかなりに異なひが悪い癖がやはり
為か東は和歌は京の生まれでまうからとする
事柳の言葉は京都と言ふ御は優美なこと東は

美しいと云ふやうなことがまうして船頭に言葉
なまりを飾ることを云ふやうなことがある方と下で
さいまもせうが一つの変しく変れるのは京都の言葉
は話に富かなる アクセントが違ひまするが……
……うれて流行にのりなりとも云ふこと
あることを吐かりて参りまする 京都にも幕府の町
奉行の役所こうよ まるものがあって大坂にも千人程
も、死人を紀州に京都在住の者は死人が
自然こなるとそれこと言っておるのなり
ゆと言うて自然こなく甚だ江戸子の場合が

ワーッと声をかけると思ひましたらそれから
現在なら此何だ さうでありますが、長陸の号令あ
の小隊近の乃ん と云ふときは言葉言葉はい
けなくそれから きまりコツト私が感じたこと
ろ まるが電信と云ふものがあらて設置
を電話で号令と大阪で流がなる訳が大阪へ
参りて或高人ゆうこんと私がまして形まれかお
対して流を まりと電信大阪言葉でする、訳が電
話の あに参りて チリレ と まりと大阪者が
江戸言葉で はるが少見分でありまず、訳が電話

を張られた大阪東京のは 横浜よりでなが大阪辺
ばかりでさうして 其為に何者と云ふ こちらが
よく 其為で大阪人が何者ですと云ふとお対
して何者とやらるれて 其為に東京人のは一
番浦子で電信と云ふ 相撲に掛るさうでまま
すアッチの言葉は電信の上には通じが悪い
東京人のは ズット一番浦子で 行って まるのが
勢ひ電信の上にも及んだ、私の男爵が京都にた
勤らて 形まれが 東京人が
ると……ありさま云ふ云ふかと云ふ

と書くは多少小さいのも南京二寸五分に当るあり
東京帝国大学にて、此以下を立いが多の言葉なる
らんてはいかあ、第拾貳号と云うて五くに変
為し京都と称うれども京都言葉は
所謂古の都にて先ず是有名な、
サアーそれでは東京の言葉は完全き缺
点かあるかそれあらば御話しなさるが江
戸言葉の改善ナヨウト故に変ら
て二つ変しいが和仏書者にこまいまるが十
二寸五分江戸に南京五寸五分にする事

[illegible]

[illegible]から都に住つて一生の中の三分の一を
自分の国に為ある和仏言葉江戸言葉に全く
の江戸子ては為しいが唯江戸子なる
自分が江戸言葉を改善する(丈)
が江戸言葉を改善するのは為し江戸子
なるの改善と云ふ為ある東京の腹
五年に住川が つけふの新発明の系に百姓家に
為ってから江戸は郎が俗に大都会に乃ちんと云
ふ話方から集まるに連れ乃ち どか四の
者が御上を暫く持いて居人と云ふ者は れ擅ふ

田原辺から来た者は先ず京都迄見物して
れば大体の所に於ては古い都人やと思ひ
て見る。王朝の面影が集まりて居る所は
元祖方々に遺ひのまゝ残る山陵、伊勢屋、近
江屋、西田屋なんと云へば眺望が多い故に其又
是東に是東と云ふが云はゞ謂是東所と云ふ一
寸の丘下に東気を奮ひて弾ず所為を擁の方
は云へば多に遠望して……種々の
と云ふ。こて京都云為が自ら是東云為に
変化されて一本調子の江戸云為が乞出に迄

ひろび京都は古い都であるから京都云為は東
西南北四方八方に萌芽して居れば、東京は僅か
三百年に過ぎて東京出の口里に方位に於ては
云ふ所である。之を一歩踏み出して一般世界の云為
であります。是れは東京云為を云ふのは口里
四方の百五十万の人口が僅かに居れば
る巨塊が狭い世界に東京云為を云ふのの
煙を摩して居れば東京云為を云ふのの
謂ひである。京都云為を加へて十万に研究し
て未だに供せざれば云と云ふ事

す、そこにもくすり者きます、ものでも先刻
お流れひきいきれが奴東京元気はとゝ
ゝと流れて遠く下ゆく舟の詩は
千海橋の上流いとの身ふる人の言葉を
揺る、そこは千海ちきゝます、甚ふて江戸元気の
鉄砲と言ものは何ちるか東都元気の事
と言ものにお好らして江戸元気は色とくく
い軽薄ちきゝます上摺ちてみゝます訳喧し
く言へば威張りらしゃうに色こしい、演説ちきを
お話きちさい純粋に江戸子の演説は流暢にお

角壹製

何にも巧みと言ふ威に乏しく話しまりけのも甚
面白の感ふる精神と言ふもちに感動が少ない
そこは元気に威張ちかに色こしい上摺ちて軽
こい軽ちこいと言ふ訳ちら話ちと言ふ
俗お東京こまりに面白く感しいと言ふ
とて拙く元気を当て切詰めて手はこつてく
やしと言ふ訳ちら話たに通ひなるか東京元
気の話は詩と申します「の」と「し」が通ひます
に甚は東京元気と言ものが話ていきひちに
ひみおり下為す癖がある毋音のまいりに■の

うは、ふいふいと言ひて、そして、土にる、高く、其後て川は
り、癖なり、東多人は、まち、中せば、黄し、
しの、黄い、ぬ、い、の「心い」と言ひ上方の人は「は
じと言ひ、まち、黄いと言ふ、こと言ひ、「は」と言ふの
訛りに、まち、比訛りが、宿山多、「ひく」を「動き」まち
ゆ、「まじ」と言ひ、川魚の「ふい」を、ふいと言ひ
ます、人にたゆうて、国まる、みを、虫で「蠅」を「はえ」
と言ひます、其他、略、まちが、陽て、いきしち
にひみゆ、を、略す、少しは、ゆ、を「少しはゆ」と
言ひます、是は、まち、特多の訛りて、まち

伊藤蔵

は人が、気が、付ゆ、気が、付ゆ、ゆ、と、ゆ、ゆ、と言
ふ、ゆ、が、ゆ、と、まち、て、ゆ、まち、ゆ、之を、は、よ、乃
の、国言葉、として、そ、れ、我の、変形を、有して、ゆ、か
と、ゆ、か、葉、と、言ふ、ゆ、を、「のつける」の、つかる、「載
せる」を、「のつ、ける」と言ふ、「落ちる」を、ちらす、「か
らを、かふ、つ、即ち、「隅」で、ちらすを、「すみ、つこ」、「弱る」と
言ふ、のも、「ゆ、や、まち、ケ」と言ひ、其ゆ、隅ふ、まち、そ、れ
は、明治、校、挙ます、は、追ます、江戸、言葉の、訛りは
決して、下、ゆ、の、言葉で、ゆく、上流、ゆ、の、言葉、ゆ、
ります、上流、ゆ、と、言葉を、取ると、ます、ます、ます、が

さらはいろ作り中と大事なことが起るとそれをれのようしてまた兵部卿の部へまたまた
言葉の詰へ碎けれのたまたまに文章に
ってる東京の言葉んの[redacted]宮様は[redacted]こと
かも甚新潟の文章の上へも「ず」「ぬ」「ぬ」と活用す
る「後まず」「後まぬ」「後まぬ」「ず」「じ」「ず」「ずん」と使
ふ所が つの東京言葉になって来る其内の研
究は所は甚だ明らかでまた「じの位の区別が
「ない」「ない」「ずん」は濁って[redacted]る[redacted]光も立
しい「ず」「ぬ」「ぬ」と言ふ[redacted]が立しい[redacted]カレトウ

のあたりの「ず」「ぬ」「ぬ」を使ってもを要は「ない」「ない」
「ない」「ずん」で立しいと言ふんが東京人
は「ず」「ぬ」「ぬ」を使はなくと言ふと全く混濁して使
って居る、その人は[redacted]新潟にして居る[redacted]
い癖と言はれ「ん」を使って居るんで「こざら
ませぬ」と言ふ[redacted]元来の俗の文法では
と「ございません」と言ふ[redacted]は「ぬ」を
使って「ない」「ない」「ずん」を使って東京言葉で
と樺太に居る[redacted]混濁して使って又[redacted]
って居るのが俗山まで、どうしても立しいと言ふ

こと世間なる まを知人を こゝは まゝ少し深く
考へ 「て」は 定 世間なる品が 形容詞 なる形 「お」「ぬ」「ぬ」
で文章言葉 合 ふい なる 東京人の言葉の
「お」「ぬ」「ぬ」である 元の通り「お」「ぬ」に変ずる 立か
らうと云ふ……東京人は ものを決断する言葉
に「さう」「れ」「れ」と「た」を使ふ 不完全 ひとくと「さ
うやう」と言はれる 言葉四 は「でや」「こや」「ぢや」と
混じて 形る 之 改の上は「さうぢや」「れーちや」と云ふ
ものは 極 ひらがなる どれにも 長き 自ふ で
は「て」「し」と云ふ 文章の上にも 多く 役

神原蔵

して言ふ うと思ふ 人 ことは 時 ことま
れ 恵山 ものの
るる あ ま フ 大抵 今日は 高い 高 で
ま ま と 思 ま 活文 を 使 ま して
書く が 「で せ」「で した」「さ で せ」「さ で す」と一
取 に ら て ま れ 書く 申す 形 使 て ら れ 文
文 言は 習慣上 さ ら れ が 比較 と 言 す
時 考 し 見 ま と 二 と 出 多 い 文 多 多
る 文 難 ま は 使 ま い 文 で す ま 先 は
れ い と ま 難 申 る 「 使 ま か 使 て る 一 八 難 ま に 士 四

此は所人力言葉を使ひなく今でもさうでつかひ
ますが言葉を使ひたら話を出……若人方も身
分ある者人の妻女は使ひなれ芸妓幇間や芸妓
なども一種ずつ言葉を作りて言葉を変へる
藝妓などが使ひたれ今日は御所
江戸を風靡して代を舞ひて全国人まで
使ひて居る所も新しく使ふ（丈夫）それで言葉でい
ざりまさと中を出くつてちすを用ひた隠語
なんでありまさ新しく文化の方で紀元前
ありまさと言葉でいひて書かれて

角屋敷

ます「でせう」「でした」「ありました」「いました」「ありました」
ます「でしたん」と言ひます。が記して来た何よりまして
御酒でありまさ流行の意化で御酒でまさ御酒
言葉ものなれば花元利申した所
流しに乗る「ぼか」附帽接続詞しまさん
出ますれば」と言葉で言ひて出ます
詩が「でます」故花「でせう」まま「でした」と言葉出し
「お酒を作ら」と「でせう」と言ひます
と言葉いさうでせ出……打消しにばかりに
ありまさと「ございます」ありまさと言ひます。それあるしてさう

でまんは可笑しいなどと揚屋衆が来ると
こそこそ文庫の二階へ行くと不見えなくなる
まさか蛙のまねもせまいかまた皮が剥けて
ぬるぬるする二つの御河に出ると揚屋衆
が集まってくるどうもこうもなくなると
言葉を変へて言葉を変へて遠
出なさるを見て
とも言はぬが来く中なかなか席を申しますが
少納言は東京言葉で
うるさくまする と云ふ
言葉が少納言あるは

角屋製

まるまるまるで少納言おるは大変言葉が違った上
流のようなさすが耳に障るこうがまるまるの
上流の上に江戸ようなさすが先ず名年
頃は在諸国から集った者のみ京都の公卿
丈は違ふ踊は清元の士と上流の言葉
とは思はぬ上流の東京言葉と云ふのは吾
が国は角にも平等に東京の上流言
葉は立派しいと云ふ事に成
はしかしい設程研究中は日本の国言
葉と云ふものを作ること是なり今国と名乗し

て三る年まで引くわけ紙情愛の場面を
あらはす[redacted]秘共は小説でも
まれ次に先刻も上に説明がありましたが
詩の唐言葉はコトバンシヨとのよるさう
山言葉は日本言葉とは異なり それは まんが人
の仲言葉でまた まれはごつと拙く例し
ふ仕言葉を作りて所 女の[illegible]面でもまた
また[redacted]少しも多く[redacted]俗駄洒落と言ふ[redacted]の[redacted]鎖
親[redacted]おらてりくと言ふ更に多く[illegible]の[illegible]殊
らずまれを挑[illegible]けれ[illegible]言文一致に

[illegible]

[illegible]て[illegible]行[illegible]動かなく[illegible]困難に陥らしめる
人々と言ふ者は慣れて[illegible]ものは面白くなく
て我しいものは面白くまして[illegible]
まする行が他くと言ふ[illegible]
ふ[illegible]ものがつかしそうして言とそのの
い言と[illegible]しれ者は詩[illegible]漢洗を
使ふ又まれが[illegible]慣下目に言はの言葉が二つあ
って一つは日本言葉で一つは唐言葉と言ふ唐
言葉の方が鄭寧に出るきのこけよと言ふよ
り味わ[illegible]方が鄭寧に出れる[illegible]言ふ

うまく行くとか出来ぬなどと又人と交はるこ
とを不陰と云ひ「つき合ふしと交際」は深の事をこ
うさい「ちう」まじわる「で何とかして作って来る」で
美しい言葉かなるかるものを使はなければ加国で
為を使ふと教育の上に邪魔になるかもしれぬと思
ひます「もの」そのまゝ庶民為に陸と教育と又
素晴き事に接くるで為のもの「ものまね」
「もの」は出来て仕方が悪く不便を用ゆる訳
で言葉は改革をする時には学者の力を借りなければ
なりぬ陸とには接くるで西洋に其の例は多く

ます「もの」で佛蘭西の言葉と言ふ事は
先づ西洋は西洋刑加日本に入れまして文の文化多
く行かれる行か佛式ばかりに入れ書くのは
佛蘭西は丁度ひ乱れ…事的書を書く佛
蘭西の仏伊世界でいかに言葉と学者が集って
の国の立場を作ったサしも丁度かの乱れ今
日用ゐられて居る西洋は先刻の論と反対
で「まちがい」が耳に入って来る事は文章で
美に取る……たい出物の例を取る今まで全
国を教育して来た仕方もの「ものまね」して一定し

てゐやうと始まりて之を全国の教育に施すやうに為りたれば仮名遣は互に今までの誤を改めて文字の進化と云ふ事を考へ喧しく言ふが為めに仮名遣の進化は多く弦方に出でたるものなりと考へられて又之に対する考へ方あり其進化とは云ふ事を云ふ事なりと教育の上に生じて行くべきを一定して万の文字一定の例を立てんとするのは仮名研究したい用ゆる方の人にとりては苦しいが尚ほ文字一定の不都合を作る人は自らの

責任として少くも日本の八百年位の文字の歴り書きの文字を訓ひたれば其五百八百の方に位は訓ひたるものは如何なるものなりとの位まで訓ひたれば良いとの事なれば区域の広いのを取るとの事は又位を定むるとの事のみ既切でもまだ少くも琉球其他を除いた位は訓ひたる少位は文字を作らんとの事なれば其のまま文字一定の改めとの事は申すまでもなく今までの文章がむかしいまの変遷くまでとの事の

まもなく 故又 文字の拙く 筆と云ふ ものは
ひとしく 言語の 表はるるや 一通文章に 書
いて 表わす 三百代 人に 附して
見るに 二枚に 書ものが きまって 云ふ ことは 少
なくて 四五枚に は 文章の 上に
誤りが 多く 言語が 記 まず 仏教の 文を 書
者が 作られ やうに すべが 最も 必要なる ま
す 先に 角日本の 国言葉と すべて それなりの
資格を 備へ なければ 万国の 知らぬ 規矩
のない 羅こい 言葉を 伝ふる 口で 書く 通りと

角屋製

書くと 云ふ ことを 文一点 とすると 云ふ こと
は 地方に 様子に なること 思ふ まで それで
あって は 先は 陸中海に なって きて 文字
一般の 市門と 云ふ こと は 全国の 国語を 統一す
る 日本中の 言葉を 同じに する 云ふ 必要
人と 仏蘭人と 法を 以て 日本人と 云ふ 感
覚に 訳する 薩摩人の 法は 私に ふらなで
薩摩人の 法は 英語を 使って 居ると 日い ま
す 平安の 言の 言葉は 如何 して 分らぬ それは
日本国民 である あと 諸東が 感ずる 通りなで

私は是非[illegible]しますが（之）そこで迎いでもなかなか
い一方に於ては如何に於ては如何陰を考えますに
……進歩のに文化かかへレトにまくアリセ
ことが云って、て廣東の人と北京の人と
はまくきを出せ美流を流してみまず隠く
心面い流てまくきまして国が生んで子孫が日本
の工業に基にまくきかかの如くのやう
に不持てまくては日本工業を如何くかまふこ
とが出来び月年工業を向て学ばうとまって
もまふこと出来ない様に成りました事を自

多の国の工業に比べやうと云ふに成る世に向つ
て新く[illegible]のが取業にまくまず日本で業
湾を成くて業湾の主人に成ゆに廣東の教師
かりくと廣東工業に成る大阪の者かりくと大
阪工業かる成ってから日本人民にすると
は一面先に工業を傳くるが仕方でまる今迄
那の工業を流して行くては日本人丹に成って
で如国くか日年くまりて横浜くまりと神戸
へまくと通にまくと行きくりて一日も早く
で流を[illegible]の様にまくと日本とこふ国は不傳記

[illegible]で一国を[illegible]ることを考えなければならぬ事は[illegible]
やうな場合でまた西洋人のやうな[illegible]ことをしませぬ日本
人の考へのやうなものとは[illegible]ことを知らずして西人に
対して彼の命令を受[illegible]てゐるのかあ
りませんとなるならばのものがあります[illegible]で
生強さんるか敵さんとこと[illegible]ことが耳に文
[illegible]ぶ[illegible]ことを生ずる[illegible]知
て[illegible]ことを考へなければならぬそ
れで要事件かや要事件は並流[illegible]ます[illegible]
為かわしい[illegible]に[illegible]移[illegible]新[illegible]るなかわし

角屋敷

い並ぶ外国[illegible]ものが[illegible]
なくて来たそうで英吉利の陸長地では並流を
陽の[illegible]にしてみて[illegible]国流
の説は唯一為を改めると[illegible]ことに為
いなくて一体の様子[illegible]国体にも[illegible]
政治がまるで[illegible]言文一致にして並流
なくて[illegible]の演説は輝華流と[illegible]演
説を通じて[illegible]が[illegible]足らぬが一時百[illegible]時
百[illegible]文[illegible]の[illegible]ことは一回や
二回では[illegible]又[illegible]ら申します

柏屋製